

第2節 史跡長岡宮跡に係る歴史的風致（史跡長岡宮跡と大極殿祭）

1 長岡京の歴史

本節では、古代の日本の都である長岡京の中心部である「長岡宮」と史跡に指定された「史跡長岡宮跡」の歴史的風致について取り扱う。

「長岡京」とは、桓武天皇が延暦3年（784）から延暦13年（794）までの、およそ10年間に営んだ都の全体のことをいう。

長岡京は、乙訓の地に造営され、天皇の住まいである内裏と官庁街からなる宮域（大内裏）と小規模な役所や貴族、都市住民の居住域である京城で構成されている。

京城の中央を朱雀大路が南北に貫き、東側を左京、西側を右京と呼んでいる。

京城の中で、朱雀大路の北方に置かれ、桓武天皇が政治を司る大極殿や天皇が居住する内裏、さらに官衙と呼ぶ役所などが建ち並ぶ都の中心のことを「長岡宮」という。

1230年前の都に人々が暮らした痕跡が、現在まで地下に残った遺跡を「長岡京跡」と呼んでいる。

このうち、都の中心部「長岡宮」において発掘調査により国の文化財として指定を受けたものが「史跡長岡宮跡」となっており、向日市内だけに存在する。

向日市を中心とした乙訓地域は、水陸交通の至便な地で、特に水運として桂川、小畑川、小泉川が都の中を貫流し、中心部の宮域付近まで船により物資運搬が可能なのが平城京から遷都された理由の1つである。

古墳時代に秦氏が開発した灌漑用水によって、ますます発展を遂げたこの地域は、奈良時代に長岡宮に相当する場所に郡衙（役所）が置かれ、桓武天皇による新王朝を迎える準備が整っていた。

平城京を廃して長岡京へと遷都する理由としては、

- ①天智天皇系の桓武天皇は、天武天皇系の都であった平城京を廃し、新たな都で、新たな政治環境を構築する必要があった。
 - ②政治の運営に弊害をもたらす寺院勢力を排除する必要があった。
 - ③律令体制の充実から陸路交通が限界となり、新たな水路交通網を確立させる必要があった。
- などといったことが挙げられる。

このような状況から、「続日本紀」延暦3年（784）5月16日条によると、遷都にさかのぼること6か月前に、中納言藤原おぐろまろ小黑麻呂、同藤原種継、左大弁佐伯さだいべん今毛人らさえきのいまえみしを遷都のため、山背国乙訓郡長岡村の地勢を視察させている。



図 2-2-1-1 長岡京と長岡宮、史跡長岡宮跡



写真 2-2-1-1 桓武天皇像《比叡山延暦寺所蔵》

この長岡村とは、現在の向日市南部一帯を指す古代の行政区画であり、その中心となる地域「長岡」の地名の由来となったのが向日丘陵南部である。

こうして、新たな都の地として、向日市を中心とした地が選ばれた理由としては、

①秦氏に資力を求め、同氏の勢力地を選定した。

②水陸交通の利便性から、長岡村の地を選定した。

などといったことが挙げられる。

長岡京への遷都は、これらの廃都と遷都の要因が複雑に関係し行われた。中でも「続日本紀」延暦6年(787)10月8日条の詔に「朕、水陸の便あるを以て、都をこの邑に遷す」同延暦7年(788)9月20日条の詔に「水陸便有りて、都を長岡に建つ」と、2度も天皇の意志が公布されるほど、古くからこの地が水陸交通に優れていたことがわかる。

造営事業は、続日本紀によると遷都5か月前の延暦3年(784)6月10日に藤原種継と佐伯今毛人が「造長岡宮使」に任命され、本格化した。そして、遷都のための視察から半年後の同年11月11日に桓武天皇は、造営が進む中、長岡宮に遷り住んだ。

桓武天皇が長岡宮に遷った後、2か月後の翌年正月には大極殿で朝賀式(元旦の儀式)を行えるほど、都の造営は昼夜兼行の急ピッチで進められていた。

そのような中、延暦4年(785)9月23日の夜、桓武天皇が、旧都平城京へ行幸し都を不在にした時、島坂付近(鶏冠井町山畑)において、造営責任者である造長岡宮使の藤原種継の暗殺事件が発生した。

探索の結果、暗殺事件に大伴氏関わっていたことが判明し、桓武天皇の弟で皇太子の早良親王にも嫌疑が及んだ。早良親王は、9月28日に乙訓寺に幽閉され、飲食を断ち無罪を訴えるが、十余日後に淡路島へ移送時に、淀川下流の高瀬橋(現在の大阪府守口市)付近で絶命した。

この藤原種継の暗殺事件は、自身の子どもである安殿親王(後の平城天皇)を皇太子とし、皇位を継承したい桓武天皇と弟で皇太子の早良親王との対立、桓武天皇の腹心で秦氏とも関係が深い藤原種継と旧都平城京の東大寺などの寺院勢力と関係が深い大伴氏や佐伯氏との対立などが背景にあったと考えられている。

このような事件を乗り越え、都の造営は継続して進められ、遷都からおおよそ2年後の延暦5年(786)7月19



図 2-2-1-1 長岡京周辺水陸交通網図



図 2-2-1-2 桓武天皇系図



写真 2-2-1-2 現在の島坂付近(鶏冠井町山畑)

日には、太政官院（朝堂院）が完成した。

遷都から6年が経つ延暦8年（789）2月、桓武天皇は、仮の内裏（天皇の住まい）であった西宮（第一次内裏）から、ようやく完成した東宮（第二次内裏）に移った。

この頃から、桓武天皇を襲う不幸なことが相次いで発生した。それは、延暦7年（788）5月に夫人の藤原旅子が30歳で、翌延暦8年（789）12月に母の高野新笠^{たかののにいがさ}が72歳で、さらに延暦9年（790）閏3月には皇后の藤原乙牟漏^{おとむろ}が31歳で亡くなった。藤原乙牟漏を向日丘陵の長岡山陵に葬って以降、秋頃から京や畿内を中心に天然痘が流行し、多くの発病者や死者が出た。また、9月に皇太子の安殿親王も病気となり、原因不明のまま長患いする。これらの不幸な出来事に加え、東国支配における蝦夷^{えぞ}との戦いの敗戦が加わり、同年の閏3月16日の詔で、桓武天皇は「国の哀しみが相次ぎ、災変が収まらない」と哀しみ嘆いている。

延暦11年（792）6月10日、安殿親王の病気が回復しない原因を占うと早良親王の祟りであるとでたため、早良親王の墓所が清められている。

桓武天皇の不安と動揺は、長岡京全体に不穏な空気をもたらした。そのような状況の中で、延暦11年（792）6月22日に式部省の門が激しい雷雨により倒壊した。続いて8月9日に大雨により洪水で桂川が氾濫し、11日に桓武天皇自ら桂川の「赤日埼」（「赤目埼」ともいわれる。現在の京都市伏見区羽束師古川町赤井前付近）に行幸し、被害状況を視察している。

自然災害の猛威は、桓武天皇に長岡京造営を断念させ、延暦12年（793）1月15日には大納言藤原小黒麻呂、左大弁紀古佐美、僧賢璟らを山背国葛野郡宇太村に派遣し、新たな都造りのため地勢を視察させている。

そして、6日後の21日には遷都のため自身の住まいである内裏を解体させ、桓武天皇は仮住まいの東院（京都市境の向日市森本町^{いぬい}戌亥）に移り住んだ。同年3月1日に桓武天皇は自身が葛野に行幸し、新京となる地を視察し、7日後には新京となる地の強制収容を行っている。

平城京から長岡京への遷都まで6か月という短期集中型の造営であったことに対し、長岡京を廃し新京への決定は短期間であったが準備は1年9か月に及ぶ計画的なものであった。



写真 2-2-1-3 東院から平安京を望む

準備が整った延暦13年（794）10月22日、桓武天皇は、新京である平安京へと向かった。

桓武天皇は、11月8日の詔で平城京の背中の国を意味した「山背国」は「山城国」に改め、都の名も地名からとる前例ではなく、安らかで平穏無事を願い「平安京」とした。長岡京の終焉である。

平安京への遷都は、桓武天皇が早良親王の祟り（怨霊）に悩まされたことが定説の1つとなっているが、「日本後紀」延暦18年（799）2月21日条の和氣清麻呂薨伝に「長岡の新京は十年が経過しても未だ完成せず、その費用は莫大なものとなっている。清麻呂は密かに上奏し、遊獵にでかけることを口実に、天皇に葛野の地を視察させ、上都に遷都させた。」とあるように、平安京遷都の建議者である和氣清麻呂など新たな勢力の登場が、桓武天皇に平安遷都を決意させたことがうかがわれる。

廃都となった長岡京内の多くの建物は、解体され新都の平安京へと運ばれ、条坊も次第に廃絶し、左京城を中心に再び条里が施行された農村に戻っていった。

このように廃都の歴史をたどった「長岡京」については、明治末期の喜田貞吉（1871－1939）の手によって、その研究が始まるとされている。喜田は、歴史学の立場から、明治41年（1908）に「長岡遷都考」（歴史地理）で、長岡京を平城京や平安京と同じ正都と位置付け、平城京や平安京に劣らぬ規模を持つ都とした。そして、大正4年（1915）に「帝都」（日本学術普及会）の中で、「桓武天皇の長岡遷都は、歴史上最も解すべからざる現象の1つである」とした。

「日本後紀」が、長岡京期の後半部分を欠くなど、基本的な史料が乏しく、研究が遅滞したことも加わって、長岡京は「仮の都」「未完の都」「幻の都」と言われる時代が長く続いたのである。

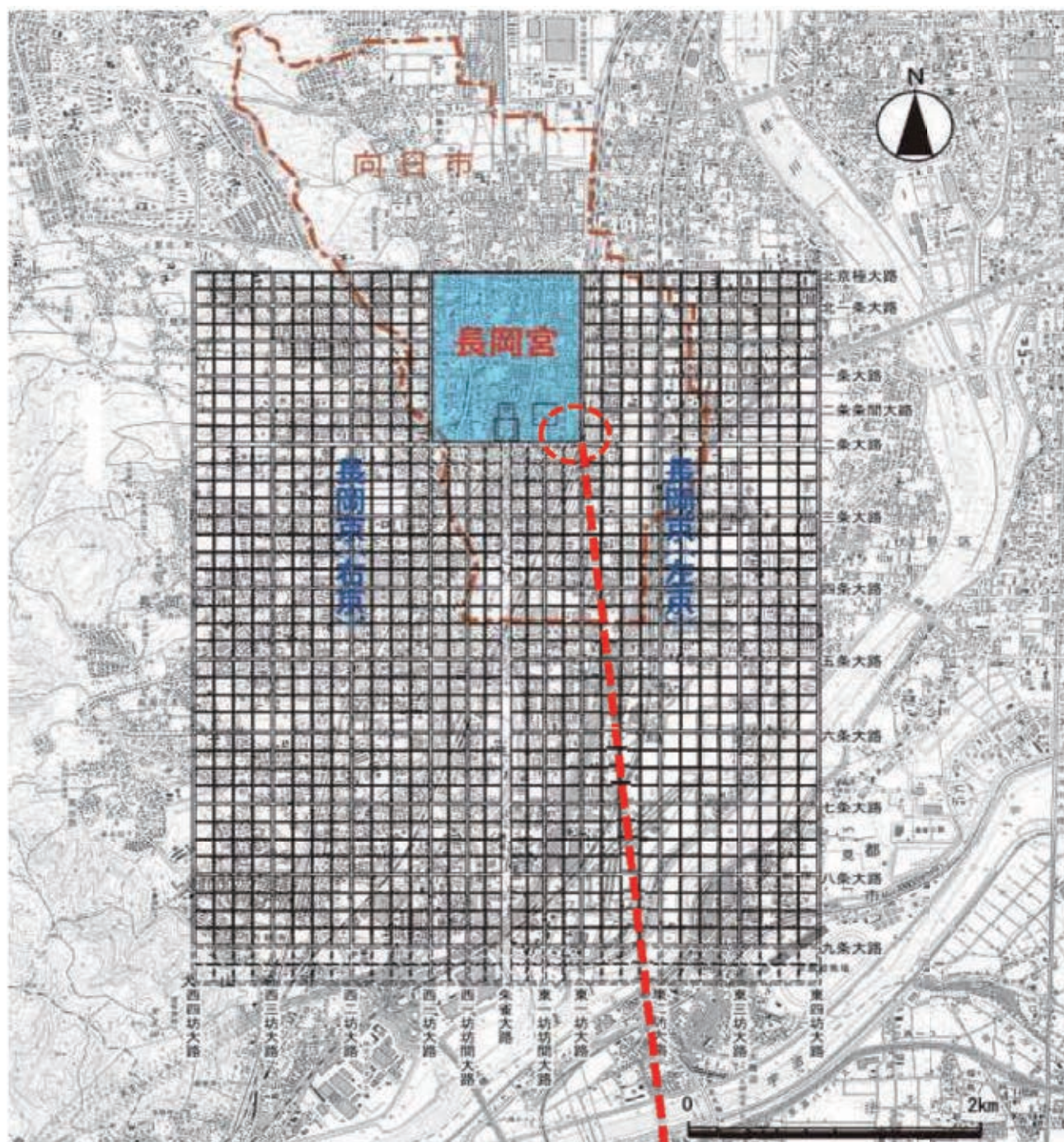


写真 2-2-1-4 喜田貞吉

2 長岡京跡・長岡宮跡の構造

（1）長岡京跡（京城）の構造

発掘調査で明らかとなった長岡京跡（京城）は、東西約4.3 km、南北約5.3 kmの規模である。この京城の中央を、南北方向にメインストリートである朱雀大路が通り、その東側を左京、西側を右京に分けていた。京城は、基本設計である条坊制に基づき、一坊1,800 尺（約533 m）を基準とし、大路（幅24 m～15 m）と小路（幅約9 m）が東西南北に規則正しく配置され、道路に囲まれた一辺約120mの土地（1町面積14,400 m²）を基準にして、小規模な役所や離宮、高級官僚（貴族）の邸宅、都で働く人々の家々、勤務する兵士の駐屯地や寺院、東西2か所の市などの施設が設けられた。



長岡京条坊 復元図

備考

条坊制

古代の中国・朝鮮半島・日本の王城、都城、都市に見られる都市計画で、中央を南北方向に朱雀大路を通し、南北の大路（坊）と東西の大路（条）を基盤の目状に組み合わせた道路を配し、左右対称で方形の都市プラン。

※右図の単位は尺。

※長岡京の造営尺は、1尺が29.6cm。

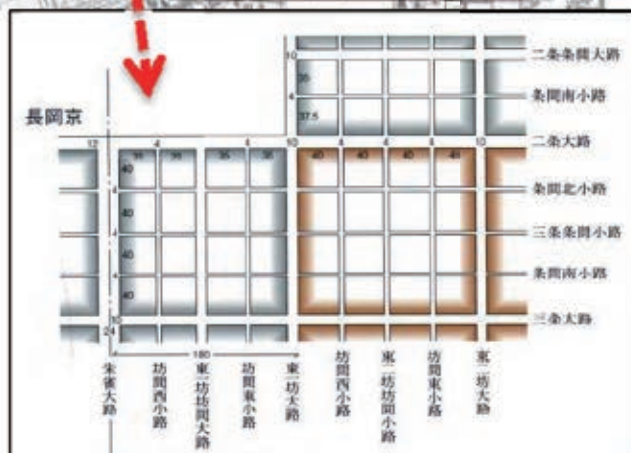


図 2-2-2-1 条坊概念図

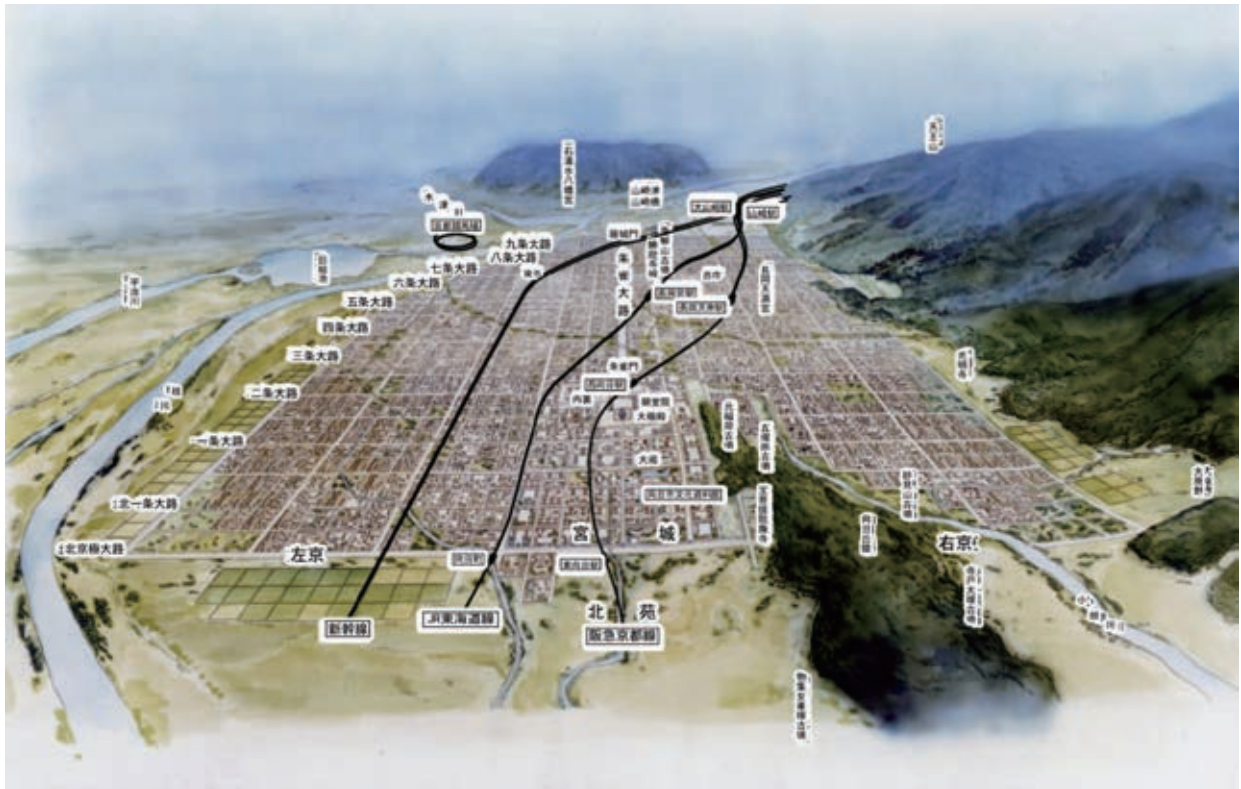


図 2-2-2-2 長岡京鳥瞰図（北から見たところ）《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》

発掘調査では、町割りされた条坊の道路側溝、町（宅地）の中の建物や井戸、トイレなどのさまざまな遺構を検出している。10 年間と短命であった長岡京は、未完成の都と考えられていたが、数多くの遺構の検出によって、都造りが順調に進んでいたこととともに、極めて完成度が高いものであったことが解明されてきている。



写真 2-2-2-1 条坊側溝（東二坊大路）
《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》



写真 2-2-2-2 掘立柱建物
《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》



写真 2-2-2-3 条坊側溝（二条大路）



写真 2-2-2-4 井戸



写真 2-2-2-5 トイレ遺構《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》

(2) 長岡宮跡（宮域）の構造

発掘調査により明らかとなった長岡宮跡は、向日丘陵と、丘陵から緩やかに傾斜する段丘地形を改変し、官衙域を確保している。

その改変は、高位から下位に向けて切り土と盛り土を繰り返すことで平坦面を確保する「ひな壇」式の造成である。

特に大極殿院・朝堂院域は、最も広い平坦面が造られた。

宮域中枢部となる大極殿、太政官院（朝堂院）における短期間の造営は、出土した瓦の分類により、後期難波宮の資材を運び、移築したことが判明した。

宮域は、大極殿院と呼ばれる区画と、その南側の朝堂院（太政官院）と呼ばれる区画の2区画で構成されている。

大極殿院には、天皇が政治を行う上で、もっとも中心となる場所である大極殿があり、その北には控えの間となる後殿が配置された。また、大極殿の前面には、元旦朝賀の儀式のための7基の幟旗（宝幢）^{のぼりばた ほうどう}が立てられる石敷の広場が設けられていた。

さらに、大極殿院の正門は、^{こうもん}閣門と呼ばれ、朝堂院との間を区画していた。

今の国会議事堂に相当する朝堂院は、東西に4堂ずつ、計8堂の朝堂が置かれ、中央に朝庭と呼ばれる広場が配置されていた。朝堂の数は、平城宮や平城京では12堂あったが、長岡宮では8堂に減らし、東・西の第四堂を他の朝堂より大きくしていることが特徴となっている。

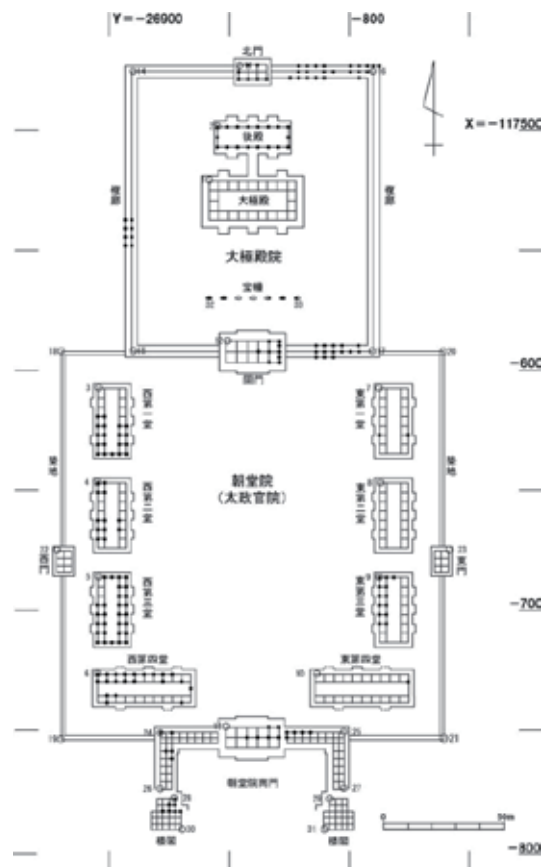


図 2-2-2-3 長岡宮朝堂院復元図 1



図 2-2-2-4 丘の上に造られた長岡宮の様子
(復元イラスト)



図 2-2-2-5 都づくりの様子
(復元イラスト)



写真 2-2-2-6 造宮のための整地
(造成の痕跡)



写真 2-2-2-7 礎石建物の検出状況

3 出土遺物

都の中心である大極殿や朝堂院は、いち早く建設する必要があったため、大阪の難波宮の建物を移築することにより、長岡京の建設が進められた。これを裏付けるように、発掘調査では、難波宮で使われていた瓦が大量に出土している。

長岡京跡の発掘調査により、瓦をはじめ、さまざまな食器や壺など多彩な遺物が出土しており、その点数は、整理済みのものでコンテナ（W600*D450*H150 cm）で11,826箱、71,721個体を数える。その他にも、文字資料として木簡約5,000点があり、「幻の都」であった長岡京を「現の都」とするための貴重な財産となっている。

長岡宮跡は、多数の遺物が出土する貴重な遺跡であり、これらを詳細に整理分析することにより、長岡京期の政治、経済、生活、祭祀などが明らかになってきている。



写真 2-2-3-1 長岡京跡出土木簡



写真 2-2-3-2 さまざまな食器や壺
《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》



写真 2-2-3-3 難波宮式軒丸・軒平瓦
のきまる のきひらがわら



写真 2-2-3-4 平城宮式軒丸・軒平瓦



写真 2-2-3-5 長岡宮式軒丸・軒平瓦

このように、往時の都や人々の生活の様子をつまびらかにする多彩な出土遺物は、長岡宮跡が非常に貴重な遺跡であることを示している。

4 史跡長岡宮跡

(1) 史跡の概要

長岡宮跡は、昭和 36 年（1961）に実施された発掘調査成果により大極殿および小安殿（後殿）が検出され、昭和 39 年（1964）に「長岡宮跡」として史跡指定を受けた。以後、内裏内郭築地回廊や築地、朝堂院西第四堂、大極殿宝幢、大極殿南門、朝堂院南門、楼閣など、長岡宮を理解する上で欠くこと

ができない重要な遺構が検出されるごとに、地区が離れていても同一名称で地域追加指定を受けている。平成 28 年 (2016)10 月 3 日現在、10 回の地域追加指定が行われ、計 15,686.45 m²が指定されている。各地区の名称、指定年月日、所有形態、面積は、以下の一覧表に示すとおりである。

表 2-2-4-1 史跡指定地一覧表

(単位: m²)

名称	地区	指定年月日	所在地	小字	国有地	府有地	市有地	公社等有地	社寺有地	私有地	その他	計
史跡長岡宮跡	大極殿・小安殿地区 A	昭和39年04月27日	向日市鶏冠井町	大極殿所		2,510.61	557.22					3,067.83
	内裏内郭築地回廊地区 B	昭和48年04月23日		荒内		1,165.98						1,165.98
	築地地区 C	昭和56年09月08日		稲葉	323.96		633.70					957.66
	朝堂院西第四堂地区 D	平成04年05月06日		山畑			1,867.86					1,867.86
	大極殿宝庫地区 E	平成11年01月14日		後所			577.74			328.95		906.69
	大極殿閉門地区 F	平成14年03月19日		後所			769.84					769.84
	朝堂院西第四堂・南門地区 G	平成14年09月20日		山畑			662.18					662.18
	大極殿閉門前庭地区・朝堂院南面回廊地区 H	平成18年07月28日	向日市鶏冠井町	後所			291.53			462.79		754.32
			向日市上植野町	山畑						110.00		110.00
			向日市上植野町	南園			922.34					922.34
	大極殿東面回廊地区 I	平成22年02月22日	向日市鶏冠井町	後所						324.03		324.03
	大極殿北・西面回廊地区 J	平成26年03月18日	向日市鶏冠井町	大極殿			1,684.81			1,082.18		2,766.99
	内裏内郭築地回廊・外郭築地地区 K	平成26年03月18日	向日市鶏冠井町	東井戸・蔵所			1,410.73					1,410.73
計					323.96	3,676.59	4,377.95			2,307.95		15,686.45

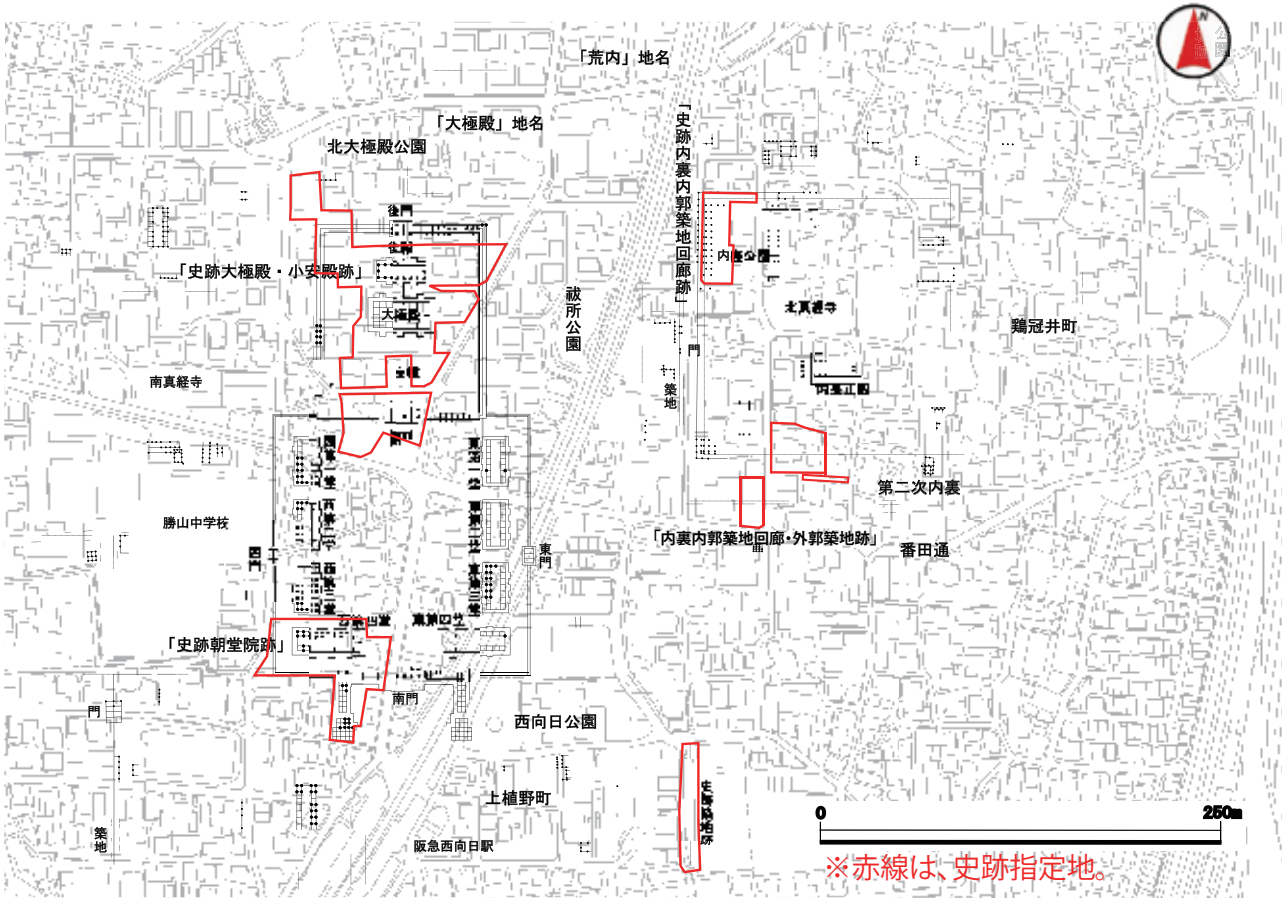


図 2-2-4-1 史跡長岡宮跡位置図

(2) 史跡の規模と特徴

〔大極殿地区〕

天皇が儀式や謁見を行う大極殿は、基壇が東西 42.8 m（約 145 尺）、南北 21.6 m（約 73 尺）、床面積約 924 m²（約 280 坪）、推定高 2.4 m である。梁間 2 間、桁行 7 間の四面に庇が付き総瓦葺建物で、南面に 3 つの階段、北面に 2 つの階段と後殿につながる軒廊がある。

天皇の休憩する後殿（小安殿）は、大極殿の真北に位置する。基壇は、梁間 2 間（12.8 m）、桁行 7 間（27.9 m）、面積 357 m²（約 108 坪）である。礎石据え付け穴の遺存状況から推定高 1.1 m で、大極殿に比べ低い基壇であった。

平城宮の大極殿基壇が東西 45.9 m、南北 23.7 m であったことに比較すると、長岡宮は小規模であり、難波宮の東西 41.7 m、南北 21.2 m と似通った大きさとなっている。



写真 2-2-4-1 大極殿検出状況
〔京都大学提供〕



写真 2-2-4-2 大極殿後殿検出状況
〔京都大学提供〕

大極殿の前庭には、7 本の「のぼり旗」である「宝幢」が立てられた。調査では、このうち日像、朱雀、青龍、玄武、白虎の各宝幢の構築穴を確認した。東西 6 m 間隔に正確に配列されたことが明らかになっている。「宝幢」は、天皇の即位と元旦朝賀に際して立てられたことが史料から読み取れる。しかし、長岡宮は天皇一代の宮で、検出された「宝幢」は日本で唯一、元旦朝賀の旗立てを証明する遺構となった。

大極殿の南門は、閤門と呼ばれ、天皇の入る大極殿と、貴族や官人が参列する朝堂院を区画する門である。規模は、梁間 2 間（8.9 m）、桁行 5 間（22.25 m）、面積約 198 m²（約 60 坪）である。

平安宮にはこの門はなく、代わりに龍尾壇という段差が設けられるのみである。長岡宮の閤門は、歴代日本の都城で最後の門となる。



写真 2-2-4-3 宝幢検出状況
《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》



図 2-2-4-2 長岡宮大極殿復元図（手前が閤門）

〔朝堂院地区〕

朝堂院は、大極殿院の南にある施設で、中庭は朝庭と呼ばれる。8つの省を統括する太政官以下、事務系行政官や親王たちが朝堂建物内に着座し政務を司る朝参・朝政の場であり、国家的儀礼の行われる場でもある。中庭は、儀式の場となる。

「続日本紀」によると遷都の2年後、延暦5年(786)7月に完成し、東西158.62m、南北164.31mで、26,063㎡(約7,898坪)の広さで、東西にそれぞれ4堂計8堂の朝堂(建物)が配置される。長岡宮の時代の建物名称が史料などに残されていないため、便宜上、北から東・西第一～四堂と呼称されている。

発掘調査により、東西の第一～三堂は、梁間4間(11.84m)、桁行7間(27.3m)の南北方向の礎石建物である。第四堂は、西第四堂の発掘調査の結果、梁間4間(11.84m)、桁行10間(39m)の東西方向の建物と確定した。

藤原宮・^{くにきゅう}恭仁宮および平安宮の朝堂数は12堂であるが、後期難波宮と長岡宮については8堂と他の宮都に比較して少ない。

これは、後期難波宮が平城京の副都として造営されたことによるものであり、長岡宮については複都制そのものの廃止に伴う桓武天皇の緊縮政策を証明する重要な遺構である。



写真 2-2-4-4 西第三堂検出状況
〔京都大学提供〕



写真 2-2-4-5 西第三堂検出状況

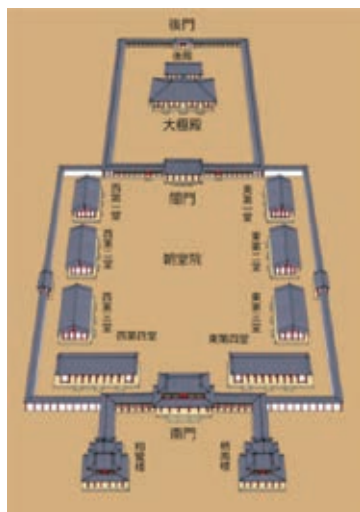


図 2-2-4-3 長岡宮朝堂院
復元図



図 2-2-4-4 平安宮朝堂院
復元図

〔朝堂院南門、楼閣地区〕

平安宮の会昌門に相当する朝堂院南門は、梁間2間（8.9 m、30 尺）、桁行5間（22.25 m、75 尺）の東西棟・総柱の礎石建物である。南門の左右には、8 間分の回廊が延び、南に折れ南端の楼閣とつながる。また、左右の回廊端には築地が取り付け朝堂院を囲う。

この楼閣は、平安宮翔鸞楼^{しょうらんろう}に相当する、南北5 間、東西5 間の総柱の礎石建物である。柱間寸法は、北から8 尺、10 尺、8 尺、10 尺、8 尺、東から8 尺、8 尺、10 尺、8 尺、8 尺に復元される。

日本の都で楼閣を擁する門は、平安宮の朝集堂院南門である「応天門」のみとされていた。しかし、その「応天門」に先立って、長岡宮の朝堂院南門（会昌門）が、日本で最初に楼閣を擁した門であることが発掘調査で判明した。

また、建築意匠は、唐長安城の大明宮含元殿の承天門にルーツをもち、長岡宮朝堂院の南門に導入され、平安宮応天門に引き継がれたことが明確になった。



写真 2-2-4-6 楼閣検出状況
《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》



図 2-2-4-5 長岡宮朝堂院 復元図 2



図 2-2-4-6 長岡宮朝堂院南門と楼閣
（復元イラスト）

〔内裏地区〕

内裏とは、古代の都の中での天皇の居所であり、私的空間である。

長岡宮の内裏は、遷都の当初は「西宮」といい大極殿の北側ないし西方に設けられ、延暦8年（789）2月に東側の「東宮」に移った。

発掘調査で確認された内裏は、「東宮」に相当する第二次内裏である。

内裏は、正殿を中央やや南寄りに配置し、北部に後宮、中央部に天皇の私的空間、南半部に公的空間を配する。

発掘調査で、内裏正殿、進物所相当施設、登華殿^{こきでん}、弘徽殿^{しゅげいしや}、淑景舎など、平安宮内裏図に示された殿舎を確認しており、平安宮内裏の原型が長岡宮にあることが明らかとなった。

また、内裏全体は、159 m四方の築地回廊で囲まれ、10 尺（1 尺：29.6cm）を割り付け基準として殿舎を配置していた。

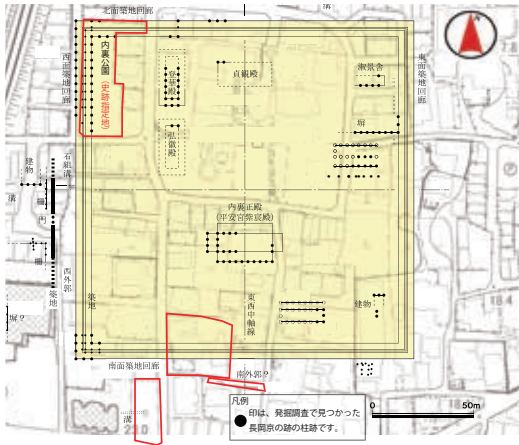


図 2-2-4-7 長岡宮内裏 復元図



写真 2-2-4-7 内裏検出状況

《公益財団法人向日市埋蔵文化財センター所蔵》

〔長岡宮大極殿遺蹟顕彰碑〕

史跡長岡宮跡の大極殿地区として整備した地の南東に、市内最大の石碑が西面して建っている。高さ約 1 m の平積み台座の中央に基礎石を置き、幅約 0.4 m、高さ 4.275 m の竿石（碑身）を乗せ、総高 5.61 m を測る。

顕彰碑の正（西）面には、「長岡宮城大極殿^{いし}遺址」と、裏（東）面には「明治廿八年二月同志者相謀建此碑 碑面題字大勲位晃親王之書也 山階宮家令正六位勲五等黒岩直方謹記」と刻まれている。

本地は、昭和 36 年（1961）の発掘調査により大極殿の遺構が検出され、昭和 40 年（1965）に京都府教育委員会により史跡整備され、以後、本市が大極殿公園として活用している。

この顕彰碑は、現在地から北西へ約 100 m の地点（現：北大極殿公園）に約 120 年前に建立されていたものを、史跡整備に際して本地に移設したものである。



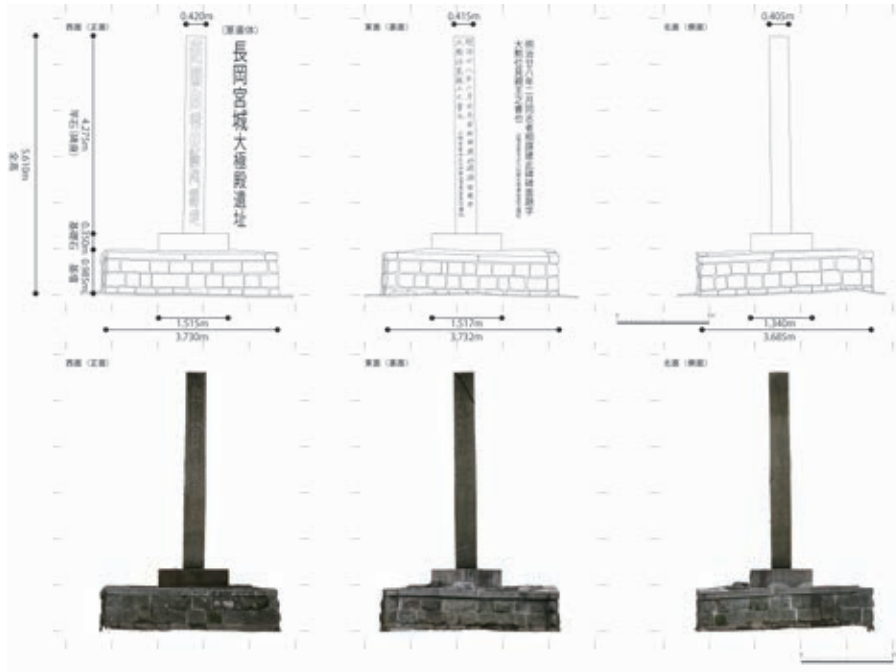
写真 2-2-4-8 長岡宮大極殿遺蹟顕彰碑



写真 2-2-4-9 当初の建立地
《京都府立総合資料館所蔵》



写真 2-2-4-10 移設される顕彰碑



上段：図 2-2-4-8 長岡宮大極殿遺蹟顕彰碑 実測図

下段：写真 2-2-4-11 長岡宮大極殿遺蹟顕彰碑

5 史跡の顕彰と大極殿祭

(1) 長岡宮跡の顕彰と大極殿祭のおこり

明治 28 年 (1895) が平安遷都から 1100 年になることを記念して、京都市において平安京と桓武天皇を顕彰する祭典を開催しようという動きが起こった。

明治 25 年 (1892) 5 月頃から京都実業協会が祭典を立案し、京都市において平安遷都記念祭委員会が組織され、「桓武天皇遷都一千百年祭」記念祭の開催と第四回内国勸業博覧会の誘致が建議され、国に協力を求めることとなった。

この結果、有栖川宮熾仁親王（後に小松宮彰仁親王と交替）を総裁に迎え、会長に近衛篤磨、副会長に佐野常民が就任して、明治 25 年 (1892) 11 月に平安遷都千百年記念祭協賛会が設立された。さらに福沢諭吉や大隈重信ら政治家や実業家などが賛成し、国务大臣も関与する国家的な一大行事として明治 28 年 (1895) 10 月 22 日から 24 日までの間、平安遷都千百年記念祭が盛大に開催された。

この平安京と桓武天皇を顕彰する祭典に際して、桓武天皇が最初に遷都した都である長岡京についても、地元乙訓郡内の人々から長岡宮顕彰の機運が高まり、長岡宮遺跡整備の取組みが始まった。

全国から寄附金として多額の事業費が平安遷都記念祭に集まる中、長岡京の顕彰にも住民から寄附の声が上がった。これを受けて、明治 26 年 (1893) 12 月頃に乙訓郡長の池上勝太郎を委員長とし、乙訓郡内の各代表を委員として「長岡宮城遺址創設会」が設立され、長岡京を顕彰する遺跡整備を行うための準備が進み始めた。また、資金調達のため、「長岡宮城遺址創設会」は、多額の寄附が集まっている「京都市平安遷都記念祭委員会」に対し、事業経費 845 円（現在の約 300 万円に相当）のうち、地元有志の寄附を差し引いた額を補助金として交付を願う文書を提出し、明治 27 年 (1894) 6 月 4 日に認められることとなった。

これを受け、顕彰碑の建立と建立地の整備が行われていくこととなった。

顕彰碑を建立する地の選定にあたって、前述の補助金交付願の中に発掘による遺物の発見が根拠とあり、明治26年(1893)に遺跡整備を目的とした調査が行われていたことが分かる。

この地の選定にあたっての研究や調査には、乙訓郡新神足村の岡本爺平や同郡寺戸村の岡崎省吾らが中心となって取り組んだ。

文献の調査や候補地の地理的調査、現地の掘削による瓦の検出なども行っており、今日の長岡京跡研究の端緒を開いたといえる。江戸時代の地誌では、大原野付近(現京都市西京区)とされていた長岡宮大極殿跡が現在の向日市域に存在したことを突き止めたのである。

これら地元の人による研究は、京都府で歴史編さんを担当する湯本文彦らを納得させるものであった。

こうして、現在の向日市鶏冠井町の北大極殿公園を建碑の場所と定めて工事が進められ、明治28年(1895)10月19日に建碑式が執り行われた。午前11時からの式典は、郡祭として顕彰碑の碑文を揮毫した山階宮家の黒岩直方、京都市参事会総代の富田半兵衛ら多くの出席の下、向日神社六人部宮司が齋主となり、乙訓郡内の各神社の神官が従った(翌日の「日出新聞」から)。

平安京では、3日後の10月22日から3日間、平安遷都千百年記念祭が盛大に繰り広げられ、最終日の翌日、25日には、時代行列が仕立てられた。翌明治29年(1896)からは、遷都の日にあたる10月22日に同行列が開催され、「葵祭」や「祇園祭」と並ぶ京都三大祭のひとつ「時代祭」となった。

同様に、長岡宮跡においても、以後、平城京から長岡京に遷都された11月11日に、郡祭(乙訓郡の祭)として、毎年「大極殿祭」が執り行われることとなった。建碑主体の「長岡宮城遺址創設会」は、石碑の建立後、名称を「長岡宮城遺址同保存会」と変更し、地元の中心となって、長岡宮跡の顕彰活用を続けていくことになった。

第二次世界大戦と戦後の混乱期に一時中断があるものの、地元の人々の史跡を顕彰する思いや、かつて都のあった地であるという誇りと愛着を、現代まで脈々と伝承する行事となっていくのである。

表 2-2-5-1 長岡宮城遺址創設会委員名簿

役 職	名 前	出身地区	おもな公職など
委員長	池上勝太郎	京都市	乙訓部長
発起人	岡本爺平	新神足村神足	
	岡崎省吾	向日町寺戸	元京都府議会議員(1880.6～1892.2)
委 員	永田徳兵衛	久世村大藪	元京都府議会議員(1880.10～1892.1)
	三宅善蔵	大枝村長野神田	
	五十棲喜平	向日町鶏冠井	のち向日町長(1906～1910)
	入江藤造	大山崎村大山崎	初代大山崎村長(1889.5～1891.9)
	能勢清左衛門	乙訓村今里	元乙訓村戸長、元京都府議会議員(1879.3～1889.12)
	加藤董成	京都市	乙訓部役所書記
	久具六之進	新神足村勝竜寺	京都府議会議員(1892.2～1895.2)、のち新神足村長(1897.6～1905.5)
	長谷川三郎兵衛	向日町寺戸	初代向日町長(1889.5～1891.11)、元京都府議会議員(1892.4～1894.2)
	正木安左衛門	乙訓村今里	元京都府議会議員(1882.7～1888.1、1890.2～1892.2)、元衆議院委員(1892.2～2年間)
	辻市郎右衛門	久我村久我	元京都府議会議員(1879.3～1880.3)、初代久我村長(1889.5～?)
出典)	長岡宮城大極殿遺址記念碑建設ニ係ル書翰(乙訓自治会館文書)根込文書		
	本公報に用いたのは向日市史、長岡京市史、大山崎町史、京都府議会時代議員録、乙訓郡誌などの記述を参考に作成した。		

(2) 大極殿祭

明治 28 年 (1895) に桓武天皇と長岡宮を顕彰して行われた建碑の翌年から執り行われるようになった大極殿祭は、第二次世界大戦と戦後の混乱期に一時中断があったが、その後、昭和 32 年 (1957) に「西山保勝会」が発足して引き継がれ、昭和 36 年 (1961) には向日町（現在の向日市）の主催で挙行されるようになった。

昭和 40 年 (1965) 頃の大極殿祭には、学校行事の一環として児童・生徒も出席していた。

現在の「大極殿祭」は、毎年 11 月 11 日に史跡長岡宮跡として整備された大極殿公園において、昭和 47 年 (1972) に組織された「大極殿遺蹟保存協賛会」の主催により開催されている。

祭が開催される大極殿公園周辺は、阪急西向日駅の北方に位置し、発掘調査の契機となった昭和 30 年代 (1955) の開発により、整然と並ぶ良好な環境を形成している。

大極殿遺蹟保存協賛会は、向日市内の区長会や商工業会、各区農家組合など市域全域の市民を中心に組織され、会長の他、副会長 2 名、会計 1 名、監事 2 名、理事 8 名の役人で事務局を構成し、現在、会員数は 208 名を数える。

協賛会の運営経費は、年会費 1,000 円 / 人および大極殿祭当日の寄付金により賄われ、年間予算は約 50 万円である。

開催日は、雨天の場合でも、祭り会場を向日神社境内の乙訓剣道場に移して実施しているため、順延されることはない。近年の生活スタイルや住環境の変化に伴い、「大極殿祭」の開催や運営には厳しいものがある中、観光振興を見据えた日曜日の開催や、市民まつり会場での開催などの案もある。

しかし、歴史的意義のあるこの地で生まれ育った誇りを大切にし、歴史遺産を守るだけでなく、それを活用し、次世代に継承することを責務として、長岡宮大極殿の地と 11 月 11 日の開催を守り続けている。

大極殿祭は、前日に、史跡長岡宮跡が所在する地元の鶏冠井区から奉納された注連縄しめなわや竹で、会場となる大極殿公園（史跡長岡宮跡）の南半部を神聖な場所とする準備から始まる。長岡宮大極殿遺蹟顕彰碑を前にして、整備地の入り口に竹で忌竹（竹の鳥居）が設置される。

当日は、平安神宮宮司および長岡京跡を包蔵する向日市、長岡京市、大山崎町の首長および議会議長など行政関係者や関係機関の長などを来賓として迎え、京都府神社庁乙訓支部長が齋主となり、同支部内の神職全員が奉仕する。

周囲を住宅が囲う公園（史跡）内において、昭和 40 年 (1965) の史跡整備時に植栽された桜の葉が色づく中、雅楽のしらべしゅばつにのり、修祓こうしん、降神けんせん、献饌のりとそうじょう、祝詞奏上、舞い奉納、玉串奉典などの動作が、古式に従い厳かに流れるように執り行われる。祝詞では、長岡京遷都の歴史と桓武天皇の業績、大極殿祭の起こり、長岡京を活かしたまちづくりを行うことへの誓いが奏上される。

そして、参列者一同が「いにしえの都『長岡宮』の歴史遺産を保護し、活用するとともに、次代に継承する」ことを誓う。

この大極殿祭の形式は、平成 6 年 (1994) から「おとくに雅楽会」による雅楽や舞など舞楽の奉納が



写真 2-2-5-1 昭和 40 年 (1965) 頃の大極殿祭

加えられているが、明治28年(1895)に郡祭として行われた建碑式から今日まで変わることなく、連綿として地域住民の長岡京跡を大切にする気持ちを表している。



写真 2-2-5-2 前日準備



写真 2-2-5-3 入口の忌竹



写真 2-2-5-4 会場準備



写真 2-2-5-5 顕彰碑前の忌竹



写真 2-2-5-6 齋主入場(手水)



写真 2-2-5-7 降神



写真 2-2-5-8 祝詞奏上



写真 2-2-5-9 巫女の舞



写真 2-2-5-10 「おとくに雅楽会」による雅楽



写真 2-2-5-11 齋祭による玉串拝礼



写真 2-2-5-12 参列者による玉串拝礼



写真 2-2-5-13 参列者



写真 2-2-5-14 献饌



写真 2-2-5-15 献饌の品々

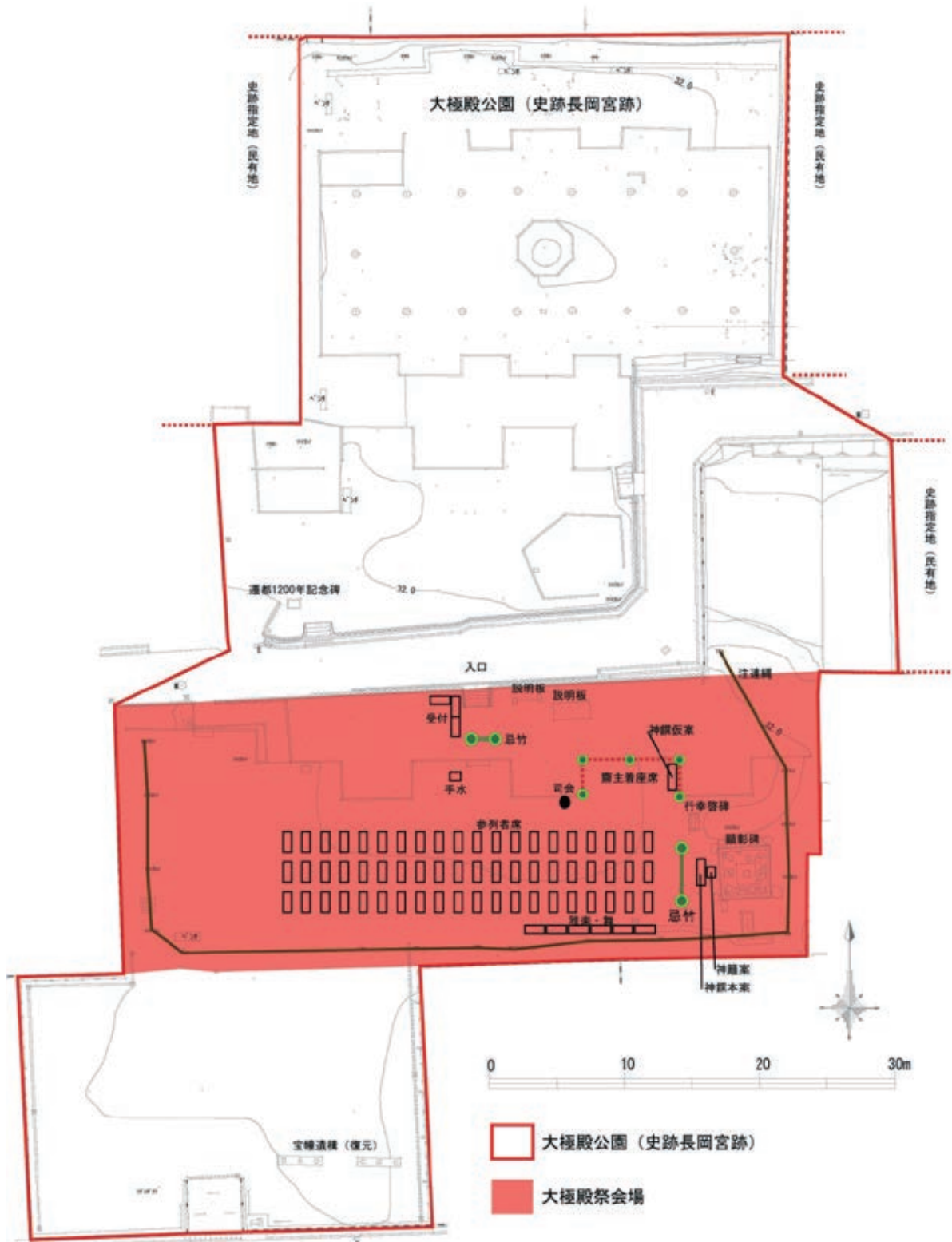


図 2-2-5-1 大極殿公園（史跡長岡宮跡）平面図と大極殿祭会場図

6 発掘調査の進展と住民の関わり

(1) 発掘調査による長岡宮の解明

史跡長岡宮跡は、阪急西向日駅周辺の住宅が密集する街の中に点在する。この史跡の調査と保存には、地域住民の活動が密接に関係している。

昭和4年（1929）の新京阪鉄道会社による西向日住宅の開発以来、開発の波が押し寄せる社会状

況の中で、昭和 28 年 (1953) に長岡町神足（現長岡京市）出身の歴史地理学者である中山修一は、
「るいじゅうさんだいきやく類聚三代格」の「長岡左京三条一坊八、九、十五、十六町、二坊三、四、六町を勅旨所の藍畑、三条
一坊十町を近衛府の蓮池にせよ」という記述をもとに、水田の畦畔の中に条里に合致しないものを見
出し、条坊の痕跡を現地に求め、「長岡京条坊復元図」を作成した。

この復元図をもとに、昭和 29 年 (1954) 12 月末に、
阪急西向日町駅前において、長岡宮（京）で最初の発
掘調査を行った。そして、翌 30 年 (1955) 1 月に初め
て長岡宮会昌門（後に朝堂院南門と名称変更）を検出
した。

その後、この地に記念碑が建てられ、現在でも個人
住宅の床下に当時の遺構が保存されている。

以後、昭和 41 年 (1966) までの調査で、会昌門およ
びそれに続く回廊、大極殿・小安殿およびそれに続く
回廊や朝堂院東第一堂が確認された。



写真 2-2-6-1 第 1 回発掘調査地



写真 2-2-6-2 第 1 回発掘調査地の現況



写真 2-2-6-3 第 1 回発掘調査地の石碑

昭和 40 年代 (1965) になると、住宅開発が激増する。阪急西向日町駅周辺に位置する長岡宮跡は、
この開発により、遺構が破壊される大きな影響を受けた。

この頃は、全国的に行政内において開発に伴う埋蔵文化財発掘の実施や現地保存、記録保存など
についての考え方がまとまっていく過渡期であった。発掘調査体制も確立しておらず、多くの遺跡が破
壊された。本市に所在する長岡宮跡も例外ではなかった。

そのような中で、昭和 41 年 (1966) に当時甲南大学教授であったじゅがくぶんしょう寿岳文章を会長とし、大阪大学助
教授黒田俊雄と長岡京の発掘調査を実施する中山修一を副会長、史跡長岡宮跡（大極殿公園）の西隣
に居住する小林清を事務局長として「乙訓の文化遺産を守る会」が発足した。

同会は、市民自らが地元の歴史を学び、遺跡の広報普及活動、埋蔵文化財発掘調査への支援と、調
査により検出した遺構や遺物の保存に取り組むことなどを主目的とした。そして、これに賛同した乙
訓地域の多くの住民が会員となった。

当時、埋蔵文化財保護の体制が整わない行政に代わり、開発による遺跡破壊の巡視、新たな遺構や
遺物の発見、発掘調査後の遺構の保存活動などを実施した。

こうした活動に支えられながら、さらに昭和 42 ～ 44 年 (1967 ～ 69) に第二次内裏の調査が実施され、
内裏正殿の基本的構造や建物配置の一部が明らかとなり、宮域全域を対象として長岡京跡が周知の遺

跡となっていく。

こうした流れの中で、中山らによる長岡京跡発掘調査団（後に長岡京跡発掘調査研究会に改称）の組織化、小林清など地元や有志の人々による支えがあり、長岡京は「幻の都」から現実のものとなったのである。

平成 26 年（2014）8 月 31 日現在、宮域で 502 次、左京域で 573 次、左京域で 1,090 次、計 2,165 次の発掘調査が実施されている。この調査件数は、他の都城遺跡を凌駕しており、狭小な市域の中で、常に発掘調査や調査に関わる現地説明会や展示会などが行われている。そのため、地元住民が誇りと愛着を持つことができる、身近な遺跡となっている。

現在「乙訓の文化遺産を守る会」の会員数は約 100 人で、継続的な遺跡の保存活動と、年数回の講演会や見学会を実施し、会報「乙訓文化」と会誌「乙訓文化遺産」の発刊などを行い地元の遺跡の保存と広報普及を行っている。

史跡長岡宮跡の大極殿や内裏をはじめ、向日丘陵の元稻荷古墳など、市民の声を反映した同会の活動により、破壊から保存へと導かれた遺跡が数多くある。



写真 2-2-6-4 開発地で遺跡を巡視する「乙訓の文化遺産を守る会」の小林清

（2）史跡の活用と住民の関わり

史跡長岡宮跡は、JR 向日町駅、阪急東向日駅、同西向日駅周辺の住宅密集地に包蔵される特徴的な史跡である。

このため、早くから頻繁になされる住宅開発などに伴い、発掘調査が行われることとなった。その調査件数は 2,000 回を超え、他の都城遺跡に比べて群を抜いて多く、現在でも年間に 15 ～ 20 件の調査を実施しており、市民がいつでも触れることのできる場所に生の長岡宮跡がある。

昭和 36 年（1961）に発掘調査を行った大極殿地区は、昭和 39 年（1964）に史跡指定され、昭和 37 年（1962）から買い上げを開始し、買い上げ途中の昭和 40 年（1965）に整備工事が行われ、大極殿公園（都市公園）として供用している。

以降、指定以前の昭和 42 年（1967）から整備が行われた内裏地区、平成 16 年（2004）の大極殿宝幢や平成 22 年（2010）の朝堂院南門楼閣地区と、史跡活用の整備を進めてきた。

史跡整備は、市街地の中で市民に見守られながら進められるため、長岡宮跡と市街地の良好な環境を損なわないよう、周辺環境を考慮し、行われる。建物の柱や礎石、基壇、回廊、築地など、検出された遺構に保護盛り土を施した後、その上面に遺構の平面的な復元表示を行ったり、部分的には立体的な整備も採用されている。

このように、細心の注意を払って整備することにより、大極殿地区は、市街地の中に長岡宮跡が溶け込んだ身近なものとして、広く市民に親しまれている。現在は、「大極殿公園」として、「日本の歴史公園 100 選」〔平成 19 年（2007）2 月 16 日〕に選定されている。

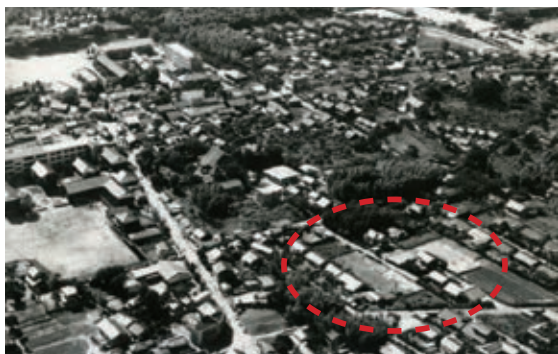


写真 2-2-6-5 昭和 40 年 (1965) の大極殿の整備



写真 2-2-6-6 平面的な整備 大極殿地区



写真 2-2-6-7 立体的な整備 大極殿宝幢



写真 2-2-6-8 立体的な整備 朝堂院南門楼閣



写真 2-2-6-9 史跡案内所

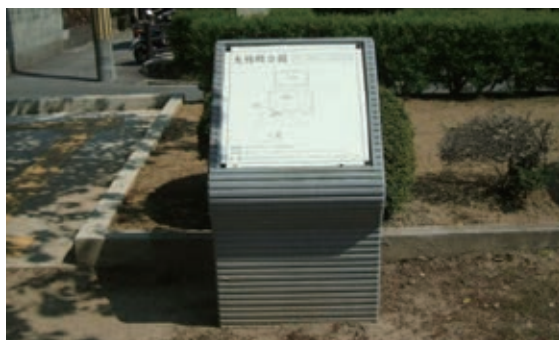


写真 2-2-6-10 スロープ入口と点字解説板

駅周辺に所在する長岡宮跡は、時には発掘調査に加わり、時には調査状況を見守り、調査結果を活用して学び触れることで、地域住民に、日々の生活の中で、ごく自然に存在する身近なものとして認識されるようになった。

発掘調査の成果としての長岡宮跡の遺構や出土遺物を、文化資料館での常設展示や発掘調査の現地説明会、講演会、出前講座などで活用している。その他、各小学校やスーパー内、法人社屋内などへも積極的に貸し出し、展示していただくことにより、広く市民の目にとまるようにしている。

発掘調査に始まる長岡京の解明は、今日の向日市まつりでの時代衣装行列などの市民活動や、小中学校、高等学校の児童や生徒、保護者など、市民を対象とした発掘体験などの歴史学習や、特色ある地域学習などに受け継がれている。

また、史跡指定を受け、整備活用している地は、阪急西向日駅前の住宅街の中に公園として点在することから、市民の憩いの場や災害時の一時避難場所などにも活用されており、常に市民が安心でき

る場所として長岡宮跡の存在が市民の心のよりどころとなっている。

さらに、朝堂院地区の整備地では、案内員を配置した案内所を設け、解説や古代衣装の試着体験、スマートフォンやタブレット端末を活用した「在りし日の『長岡宮』の体験」など、新たな取り組みも始まっている。

明治 28 年 (1895) 以降、毎年行われている「大極殿祭」の終了後には、大極殿遺蹟保存協賛会員および見学者に対し、長岡京を広報するため、向日市文化資料館の市民ボランティアにより「大極殿祭ウォーク」として史跡めぐりが開催されており、市民による取り組みも活発である。

このような長年にわたる市民の活動により、長岡宮跡に対する理解が深まるとともに、長岡宮跡だけでなく、本市に多数存在する歴史・文化資源に対する人々の考え方に影響を与えるようになってきた。近年、長岡京跡以外の遺跡についても認識が深まり、重要な遺跡として保存整備も実施されるようになった。

さらに、遺跡周辺の住民により、「森本遺跡保存会」〔弥生時代の集落遺跡、昭和 57 年 (1982)〕や「物集女城を考える会」〔中世の城郭遺跡遺跡、平成 6 年 (1994)〕などといった組織が結成され、遺跡の保護や広報普及、地域交流が行われ、地域の活性化に寄与している。

発掘調査活動の主体は、民間から行政に変わってきているが、現在も地元の多くの人々が見守る中で行われており、その結果や整備された史跡は、歴史ウォークや講演会、説明会、地元小中学校の生きた歴史教材として活用されている。

また、市民の人々が主体となって開催されるイベントには多くの人が集い、市民の史跡長岡宮跡を守り育てていこうとする心意気が伝わってくる。



写真 2-2-6-11 現地説明会



写真 2-2-6-12 発掘体験学習



写真 2-2-6-13 親子体験発掘



写真 2-2-6-14 出土遺物の屋外展示



写真 2-2-6-15 中学生の職場体験と小学生の地域学習



写真 2-2-6-16 市民祭での古代衣装行列



写真 2-2-6-17 スマートフォンやタブレット端末、
古代衣装を用いた活用



写真 2-2-6-18 市民の憩いの場 大極殿公園

7 まとめ

現在、市民は、史跡の整備地やその周辺、あるいは市内において、1230 年前の古代日本の首都「長岡宮」の様子を直接、目にすることはできない。

しかし、市民団体や行政による「長岡宮」に関するさまざまな取組みや活動が行われることにより、在りし日の「長岡宮」の姿を思い描けるようになってきた。そのようななかで、120 年以上にわたり、地域住民の手により、連綿と「大極殿祭」が行われている。

この「大極殿祭」を守り続けることが、史跡指定の拡大や保全整備の原動力となり、時代行列やボランティア活動など活用の促進となる取組みへと繋がり、さらに、地域振興や観光振興の資源として注目されるようになってきている。

大極殿のあるまち向日市は、京都や大阪の大都市近郊の住宅都市として発展を遂げてきた。

市民は、郷土への愛着と文化的生活の向上を求め、遺跡調査と保存に関わる束縛を理解し、受け止めている。貴重な遺跡が立地する向日市域において、今から約 120 年前の明治中期以来、地域住民が中心となって調査と解明、さらに保存の努力が続けられてきた。

長岡宮跡は、平城宮跡のように広大な範囲がすでに国の特別史跡として存在しているわけではなく、宅地開発などに伴う狭小地において、地域住民の協力を得て発掘する機会が与えられ、その成果をジグソーパズルのようにピースをつなぎ合わせることで、古代の都としてその姿が明らかになってきた。史跡長岡宮跡は、住民の活動とともにあり、伝統と歴史が良好な市街地の景観に溶け込み、一体となつてすばらしい歴史的風致を形成している。